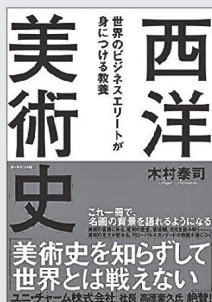


## 新刊紹介



### ■ 世界のビジネスエリートが身につける教養「西洋美術史」



著者 木村 泰司  
発行 ダイアモンド社  
定価 1,600円+税

私自身に絵心はなく、もともと西洋美術に興味があったわけでもないのですが、このような本を自分の意志で購入するようになったことが不思議です。私の妻は音楽の仕事に携わっていますが、同じ芸術として通じるものがあるらしく、美術鑑賞を趣味

にしています。結婚後、私も美術館に連れて行かれるようになりましたが、実は未だにどこが面白いのかよくわからず、美術鑑賞を楽しめるようになりたいと思っていました。そこに、この本の帯に書いてある「これ一冊で、名画の背景を語れるようになる」という文が目に入り、購入に至りました。

学生時代に読んだマンガのなかで、よいブドウが獲れた年の美味しいワインも飲むけれど、悪いブドウが獲れた年のそれほど美味しくないワインも飲み、ワインの背景の歴史を感じながら飲むことがこれ以上ない贅沢だという内容がありました。歴史を感じて楽しむことは素敵だなと、今でも印象に残っていますが、美術鑑賞にも同じことが言えるようです。この本の「はじめに」に、「欧米における『美術』は(中略)その国、その時代の宗教・政治・思想・経済的背景が表れている」と書かれています。

内容は、西洋の歴史に合わせ、有名な美術作品の背景についてわかりやすく説明されています。歴史を知ると、確かに作品の捉え方が深くなると感じました。美術館にも、作者の紹介やその時期の歴史などある程度は書かれています。基礎知識がないとよくわかりません。その基礎の部分を知ることができる本だと思います。また、著者は西洋美術史の専門家ですが、財界人や企業向けの美術セミナーで講師をされているためか、私のようなサラリーマンでも読みやすい文章でした。本を読み終わり、次に美術館へ行く時が楽しみです。(足立)

### ■ 甲子園の負け方、教えます。



著者 澤田 真一  
発行 報知新聞社  
定価 1,500円(税込み)

本との出会いは不思議なものである。情報渉外という仕事柄、様々な専門の方々にお会いし、話をお伺いする機会に恵まれています。お話を伺っている中で、更に別の専門の先生方や公的な機関の方々のお名前が挙げられることもあり、その時は必死にメモを取り、後程、インターネットで検索をします。

ある打合せが終わり、議事録を作成しようと、打合せ時に挙げられたお名前を検索すると、同姓同名の本書がヒットしました。「なんだこれは?」と思い、一旦はスルーしましたが、題名が気になり、気付けば本屋でこの本を探していました。

残念ながら本屋には置いていなくて、ネット注文し、手に入れました。全く別の話ですが、ユーチューブには様々なスポーツの映像がアップされています。

特別詳しくはないのですが、ボクシングの映像をよく見る時期がありました。日本人ボクサーが海外の選手にノックアウト勝利を収める映像は、同じ日本人として、「スカッと」します。見入ってしまいます。ノックアウト勝利のベスト10だとか、ある選手の特集だとか、たくさんアップされています。

が、そういった映像を見てみると、段々、何度もノックダウンされても立ち上がる海外の選手の素晴らしさの方が気になり、勝つ方も凄けど、何度も立ち上がる敗者も素晴らしいな、と思うようになりました。

まさに、本書は大舞台で負け続けた高校の歴史(監督の歴史)が記載されています。

甲子園で0勝7敗。甲子園に出場するチームを作り上げるだけでも大変なことなのでしょうが、甲子園で勝てない。何度も挑戦する姿はやはり、素晴らしい。(君島)

### ■ 江戸川乱歩と横溝正史



著者 中川 右介  
発行 集英社  
定価 1,700円+税

小学生の頃、江戸川乱歩の少年探偵団シリーズに出会ったのをきっかけに推理小説ファンになりました。中学生の頃は角川映画の影響もあり、横溝正史の金田一耕助シリーズにはまり、高校時代は高木彬光が創造した探偵、神津恭介にあこがれつつ、子供向けでない乱歩作品の妖しさにも驚き、

海外作品を含め、かなりのめりこんでいたものですが、社会人となり、忙事に紛れ、すっかり推理小説とは、ご無沙汰となっていたのを改めて気づかされた一冊です。

明治時代に黒岩涙香が発表した「無惨」という短編が日本の推理小説の元祖といわれています。その後には推理小説の要素を盛り込んだ、半七や銭形平次などが活躍する「捕物帳」という時代小説のジャンルは発展しましたが、現在のように、日本で推理小説がジャンルとして確立出来たのは、江戸川乱歩と横溝正史のおかげと言っても過言ではないと思います。

本書では、戦前から戦後にかけて日本の推理小説草創期を牽引した乱歩と正史のそれぞれの生涯と、その交友の様子が描かれています。

二人は、大正時代に雑誌「新青年」で、ほぼ同じ時期にデビューし、それから20年ほどは「乱歩大活躍の時代」、戦争中の5年間は、国策?で二人とも執筆を止められ、戦後20年ほどは「乱歩、横溝ともに大活躍」、そして、次の10年は、「乱歩は踏みとどまるも横溝は零落?!」となりながら、その後「横溝大ブームが到来!」という変遷を丹念にエピソードを積み重ねながら記されています。

また、二人がかかわった雑誌や出版社の興隆と凋落とも関連づけて記されているので、視点を変えれば、大正・昭和の出版業界の栄枯盛衰の様相も呈しています。(坂田)

## ■ 労働者階級の反乱



著者 プレイディみかこ  
発行 光文社新書  
定価 820円+税

英国におけるブレグジット（EU 離脱）の国民投票後の社会情勢と、その推進役であった労働者階級の暮らしぶりを、著者が暮らす労働者階級の街ブライトンから眺める。ジャスティン・ジェストやセリーナ・ドッドの著作をベースにした、英国における労働者階級の百年史や彼らの思想的背景の考察も面白いが、何しろ実際の労働者（著者の友人たち）の生の

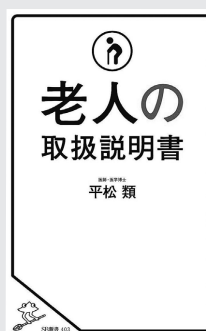
声が読めるのがいい。あくまでもひとつの立場からの見方ではあるが、本書を読むとサッチャーやキャメロンら歴代の首相が行ってきた政策がいかに英国民を経済的に分断してきたかがよくわかる。そしていかにそれが右傾化と排除の論理の温床になっていくのかということも。

本書によれば、英国における運動支持者たちの背景は、トランプ旋風のような排外主義的なものとは違い、政治の失敗による社会制度の疲弊と、これ以上移民が増えて生活が脅かされることに對する不安であるとのこと。さらに「貧しい白人労働者階級は、同じくらいに貧しい移民の人々に対してエリート意識のようなもの」を持つため「白人というマジョリティの中にいる下層民としての立場が真の問題から目を逸らしてしまっている」というものもあるようだ。

テーマは固いけれど読んでくくはなく、労働者階級の百年史にサブカルチャー史を絡めたところなどは、いかに傑作エッセイ『花の命もノー・フューチャー』の著者らしい。今イギリスで何が進行中なのか手っ取り早く知りたい方にはお薦め。

(洞谷)

## ■ 老人の取扱説明書



著者 SBクリエイティブ  
発行 平松類  
定価 800円+税

お年寄りが「同じ話を何度もする」「赤信号でも平気で渡る」「都合の悪い話は聞かさないフリをする」などの困った行動に遭遇したことはありませんか？ 特に、親にそんな態度を取られると、ムカ～っとしますよね。

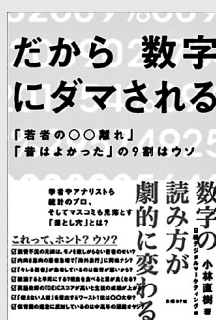
これらは「トシだからポケてきた」のか、「トシを取ってガンコになった」のか、「若いモノへのひがみ根性」なのか…？ その「なぜ？」を医師が自分の経験や内外の論文・データからまとめた一冊です。

通常この手の話では認知症患者を取り上げることが多いと思いますが、この本では、ごくふつうのお年寄りがモデル。自分の親や知人・友人、人によっては自分が当てはまるという方もいらっしゃるのでは。そんな身近なお年寄りが起こす困った行動について、「こう思うのは間違い」「こうするのが正解」という対処法、それだけでなく「自分がそうならないため」の予防、でも「自分がなってしまうたら」という4つのポイントから述べられています。「あるある！」と思わず叫びたくなるお話もあるのではないのでしょうか。

誰でもトシを取ります。困った行動を起こすお年寄りは、もしかしたら未来の自分。お年寄りには、そもそも赤信号が見えていないという衝撃の事実もあります。「トシを取るとこんな変化が起こるんだ」という知識を仕込んでおくと、何かあってモイライラせずに済むかもしれません。

(鈴木)

## ■ だから数字にダマされる



著者 小林直樹  
発行 日経BP社  
定価 1,500円+税

話の中に数字を織り込むことで、聞き手に具体的なイメージをわかせるほか、説得力を増す効果があるといわれます。しかし、その数字が物事の一面を捉えたものや、性質の異なるものの比較であった場合、ミスリードへとつながります。

例えば、「若者の〇〇離れ」。海外旅行離れ、ビール離れ、恋愛離れなどをよく耳にしますが、その実態は、そもそもの若者人口減が要因であったり、若者よりむしろ他の世代の方で激しく落ち込んでいたりする場合があります。ひどい統計では、調査対象が前回と異なるために矛盾が生じている結果をそのままリリースしたというものもあります。

また、何となくイメージが先行しているものの検証として、「保育園建設を反対しているのは中高年の男性」、「少年非行は年々増加」という事例を改めて調査すると、「建設反対に同感と回答した比率が最も高いのは40代女性」となったことや、「少年検挙数(人口比率)は過去最低を更新し続けている」ことがわかります。

メディアのセンセーショナルな記事を鵜呑みしない、自身の目で見たことがすべてだと限られた視野を過信しないことに注意しつつ、データの本質を見抜く行動習慣を身につけたいところです。

(西田)

## ■ 「箇条書き手帳」でうまくいく 初めてのバレットジャーナル



著者 Marie  
発行 ディスカヴァー・トゥエンティワン  
定価 1,400円+税

本書では、市販のA6サイズ程度のノートを使用し、箇条書きと記号によりタスクやスケジュール、メモなどを効率的に管理する「バレットジャーナル」について、実際の写真入りで説明されています。

「バレット」とは、箇条書きの先頭につける点「・」(Bullet Point)のこと。バレットジャーナルは大きく四つの項目から構成され、目次となるインデックス、半年の予定を入れるフューチャーログ、月間を管理するマンスリーログ、1日の予定とタスクを管理するデイリーログ、となっています。書き方は、まず予定等を箇条書きで記入していき、予定が達成されたら箇条書きの最初に記した「・」に重ねるように「×」印を付けていきます。予定が先送りになるのであれば、「>」印にしておき、全て完了したら「×」にすることで、進捗状況が一目瞭然となります。筆者の場合は年間3～4冊くらいが埋まるそうです。

私が気になったのがデイリーログの部分で、一般的な手帳と違い一日のスペースを制限されないうえ自由度が高く、記録したいことを全て放り込むことができます。メモ帳や日記になるばかりでなく、時には家計簿やスタンプ帳にも、何にでも使えることに魅力を感じました。この手法を是非参考にしたいなと感じました。

(伊藤)